

◆優 秀 賞◆

多様性

江陽中学校 三年

矢島 花音

近年、LGBTQの人がカミングアウトしたり、自分の生まれた性と性自認が違うことを公にしたりする人が増えてきたと思う。そんな中、私たちは学校でこう学んでいる。

LGBTQの人を差別してはいけません。

多様性を認めましょう。

しかし、私は、こういう言葉を聞くと、もやもやとしたものを感じてしまう。「差別」や、特に「多様性」などという言葉は、その前提として、「私たちと違う」という意識があるように思うからだ。

こう考えるのは、私自身の経験からだ。私は、物事に対して、感情をあらわにしたりせず冷静に見ることができる方だ。一人で黙々と目標に向かって進むことも嫌ではない。体育の後の教室で髪の毛をとかしたりヘアオイルをつけたりはしないが、清潔感には気をつけている。友人との昼休みの会話の「芸能人だと誰が好み？」という話題では「わかんないよ。興味ないし。」と答えている。本当に芸能人に疎いからだ。

しかし、こういう私自身を、認めてもらうのは難しいようだ。周りの、一部の友人ではあるが、「私たちと違う」は、どうやら、LGBTQの人であるにつながるようで、私の恋愛対象は女だろうと思われる節がある。こういう友人との会話では、私に対して気を遣うように一言、「多様性だか

らね。」と言われる。

自分たちと違えば、もう「多様性」だ。そこには、「大多数の私たちが正しい存在なのだ」という気持ちが見える。これこそが「差別」ではないだろうか。私の感じるもやもやの正体は、これだろう。

「多様性」。手元の辞書によると、「いろいろな種類や傾向のものがあること。変化に富むこと。」とある。そう、それだけのことなのだ。私たちは、変化に富む存在。もともとそうなのだ。

しかし、今、「多様性」が少数派を表す言葉になっていないだろうか。自分と違う人たちという意味をもっていないだろうか。

女性が女性を好きです。

女性が男性を好きです。

これだけでよいのではないだろうか。私は本当の意味での、「多様性」が広がればいいと思う。「多様性」は私が経験したようなものではないし、だれかに疎外感を感じさせるものでもない。私たち一人一人を認めるようなもっと優しいもののはずなのだ。